

会 議 要 録

会 議 の 名 称	令和元年度酒田市文化芸術推進審議会(第1回)
開 催 日 時	令和元年5月23日(木) 午後3時 ~ 午後5時
場 所	酒田市役所7階701号室
出 席 者	<p>○出席委員 中川 幾郎 委員、熊倉 純子 委員、工藤 幸治 委員、上松 由美子 委員 田中 章夫 委員、阿部 直善 委員、加藤 聡 委員、加藤 真知子 委員 白旗 定幸 委員</p> <p>○欠席委員 市原 多朗 委員</p> <p>○事務局 本間教育次長 (社会教育文化課) 阿部課長、遠田課長補佐、小松補佐兼係長、佐々木主査、土門主査、小野主査 川島主査、中里調整主任、齋藤主事、菊池主事</p>

1. 開会(事務局)

2. 審議会の進め方について(事務局)

審議会の進め方について説明する。本日は、今年度初めての審議会となるが、この後、教育委員会より審議会に対し、事業評価について諮問する予定である。資料の事前配布が出来なかったため、本日は説明と意見交換のみとする。それを受け、9月に2回目の審議会を開催し、答申の最終案を確認いただき、9月に行われる教育委員会で、答申書を提出いただく方向で考えている。その間に、評価用の様式を送付するので、評価等を記入いただき、8月中に提出をお願いする。ご多忙の所恐縮だが、協力をお願いする。

それから、昨年度同様、今年度最後の3回目の審議会を、2月又は3月に予算の内示が出たら、開催を考えている。以上、よろしく願います。

3. 報告(事務局)

それでは、文化行政の組織体制について説明する。昨年度の答申の中で、組織体制の見直しという指摘を受けていたので、組織の見直しを行い、昨年度から活動していた酒田市本間美術館連絡協議会を「文化芸術推進プロジェクト会議」と名称を変更し、酒田市文化芸術推進計画を推進するため、文化芸術全般の事業を行っていく組織として発足させた。団体の構成は、事業計画、予算、決算の権限を有する企画運営部会(6名)、各種事業の検討、調整、実施を担う作業部会(13名)、各種事業を実施する上でサポートする文化芸術推進サポートグループ(登録者10名)で構成されている。

サポートグループについては、随時募集していく。プロジェクト会議の会長は審議会の副会長でもある工藤幸治委員、副会長は田中章夫委員。

文化芸術推進プロジェクト会議の活動方針については、条例及び計画に基づき、多様な事業を企画運営することにより文化施設の利活用を促進し、本市の文化芸術の総合的な推進を図ることを目的とする。事業方針について、酒田市文化芸術推進計画に基づき「社会包摂と育成」に重点をおいた事業を実施していく。

詳しい事業内容の説明は割愛する。予算は酒田市より負担金 19,693 千円で、発足日は4月1日。

その他として、市民の意見を広く聴く場として、文化のまちづくり市民会議を6月15日(土)に、えぞこホールの前館長である水戸雅彦氏をお迎えし、「文化芸術に参加しやすい街とは」というテーマで、次年度の事業提案などをワークショップ形式で行う予定である。今年度より新たな組織体制で、条例と計画に基づいた文化芸術事業を推進していく。よろしく願います。

4. 諮問(教育次長)

酒田市文化芸術推進審議会に対する諮問について。酒田市文化芸術基本条例第20条第2項の規定に基づき、下記の事項について、審議をお願いする。

諮問事項 酒田市文化芸術推進計画に基づく事業評価について。

評価期間 平成30年4月～令和元年8月まで。

諮問理由 酒田市は、文化芸術によるまちづくりを推進するため、平成30年3月に酒田市文化芸術推進計画に基づき、事業を実施している。このことから、文化芸術に関する施策を推進するため、平成30年4月から令和元年8月まで実施する事業について、貴審議会に諮問する。

5. 会長挨拶

前回の審議会を2月に行い、それから約3か月が経過した。前回はまだ雪が残っていて、滑りそうになりながら歩いたが、今日は夏を間近に感じる気候で驚いている。

これまで色々とお苦勞いただいたおかげで、条例が施行され計画も順調に実施に入った。そしてそれを改めて上昇気流に乗せるために、評価システムをそこに導入し、これからの酒田の文化政策について、相互に関連性の深い事業を協力し合いながら進めていくという形を軌道に乗せなくてはならない時期に入ったと思う。

その関係で、対象事業の評価の期間を一年半分となっているが、次年度以降は概ね一年ごとに評価をし、それを翌年度に反映していくという流れと理解してもらいたい。今日もその評価システムに関する説明があるかと思うが、審議をお願いする。

それでは、令和元年度の第一回の審議会を開催するが、本日は市原多朗委員から欠席の連絡をいただいている。審議会規則第3条第2項の規定により、会議は有効に成立していること御報告する。

それでは、事務局に説明いただき、審議に入る。

6. 説明(事務局)

令和元年度上半期(4月～8月)までの事業について説明させていただく。市の予算要求に間に合わせるため、年度区切りではなく、平成30年度事業と令和元年度の上半期事業の約一年半分の事業を審議いただく。配布した資料では、平成30年度の事業は35事業、令和元年の8月までの事業は15事業、文化芸術推進事業の基本施策は20施策あり、それに期待できる効果を示している。特に効果があったと考えているものは、誰もが文化芸術に親しむことができる文化的な環境の整備、あるいは学校教育に関する文化的な興味、充実、将来の文化芸術の担い手の育成といった部分が非常に多い実態である。一方、文化芸術の国際交流、それから文化芸術による施策と生涯学習による連携及び強化、伝統的な食文化の継承と創造的な食文化の発信といった部分は、対応する事業が無かったので、今後の課題として受け止めている。

また、別の資料では、中川会長が作成したファクトと評価というシートを1枚の表にまとめたもので、左側の覧がAction、Plan、Do、Checkと、PDCAサイクルの形になっている。そして各項目に対してどのような事業を実施したかを、事務局で入力した表である。ここでは時間の関係上、特徴的な事業のみポイントとなる。

どのような社会実態と課題を解決しようとするもので実施したものか、それから、何を変えようとするものなのか、成果を何に求めたのか、そして評価についてのみ説明する。

それでは現代ダンス活性化事業について説明する。高校演劇部2校、小学校2回、高校1回、公募型ワークショップ1回のダンス事業を行った。課題としては、文化芸術が一部の人の趣味の範囲で捉えられることが多いということ。文化芸術の意義について、ダンスを通して伝えたいということで事業を行っている。また、コンテンポラリーダンスの特性を活かして、青少年のコミュニケーション能力を高めることを目的としている。成果については、アンケートを実施して満足度を調査している。評価として、一般財団法人地域創造の助成を受け、指導を受けながら実施したので無駄の少ない事業展開ができたと考えている。また予算、スケジュールも予定通り実施できた。有効性の評価については、今回はコンテンポラリーダンスの中でも舞踏の講師をお招きしたので、舞踏のワークショップを通して多様な表現の仕方があり、コミュニケーションを円滑にする手段としてのダンスを伝えることができたと考えている。次年度への改善としては、より広い市民にコンテンポラリーダンスの良さを伝え、人材育成の理解を深めるように、継続的に続けていくことを考えている。

次に工藤俊幸氏による合唱指導である。市内の中学校3校に指導に行っていた。課題は、全ての中学校が取り組む合唱コンクールがあるが、プロによる指導を受ける機会は極めて少ない状況にある。目的は、曲の理解を深め、豊かで美しいハーモニーを目指すことである。成果目標は、各校概ね2時間程度、プロの指導だったが、クラス指導に変更になった学校や、半日を費やして実施した学校もある。予算、スケジュールは概ね予定通りに出来たと考えている。有効性の評価については、曲の理解を深める機会を提供できたことで、生徒の曲に対する思い入れも強まり、熱の入った練習が重ねられ、学校が目指す合唱コンクールの目標達成になったと考えている。次年度への改善点は、市内の全中学校に継続的に実施できるように進めていくことを考えている。

次に鑑賞事業として、演劇集団風錬ダンス「まつろわぬ民」を希望ホールで行った。課題は、地方では文化芸術に触れる機会が少ない状況にあることから、質の高い演劇を鑑賞するため企画している。目的は文化芸術活動のしやすい街だと答える市民の割合を増やす、文化芸術活動の満足度を高める、文化資源について誇りを持つ市民の割合を増やすこと、成果目標は入場者数。評価は、予定販売枚数を大幅に下回り、負担金額が増額したこと。また予算、スケジュール共に計画通りに実施出来なかった部分があり、一部変更になった。有効性の評価については、集客的には目標値に至らなかった部分はあったが、内容的には質の高い鑑賞機会を提供できたことで、概ね達成できたと考えている。次年度への改善は、より効率的効果的な広報戦略を展開し実施していくことだと考えている。

続いて、「さとうときひろ先生と遊ぼう」。東京藝術大学教授である酒田出身のさとうときひろ先生が、小学生の子ども達と一緒に段ボールを使って望遠鏡等の簡単な工作をしながら、カメラに対する理解を深める等、遊びながら一緒に学ぼうという事業である。課題は以前行ったアンケート結果より、文化芸術活動をしやすい割合が約50%だったことから、多様なジャンルの事業をする必要があったということである。目的は文化芸術活動のしやすい街だと答える市民の割合を増やすことと、子どもたちが文化芸術事業に触れる機会を提供し満足度を高めるということである。成果は、参加者の満足度について、アンケートを実施して調査している。評価は、事前協議を念入りに行い、予定通りの人数で実施できた。無駄を出さずに実施出来たと考えている。予算については、予定通り実施出来たが、事業の告知が若干遅れたため、他の夏休み事業と重なった部分があり、参加者の募集に苦労した面もあった。有効性の評価は、計画を策定し、課題に対して事業を実施している。現役の東京藝術大学教授である、ときひろ先生に、制作する面白さだけでなく、仕組みについても学ぶ機会となり、参加者の満足度も高かった。次回も参加したいという声も多かったことから、概ね効果は達成されたものと考えている。次年度は早めの告知により、多くの子ども達に文化芸術の楽しさを伝えられるよう

にPR方法も検討していくことを考えている。

次に、研修会については、「文化芸術によるまちづくり」、「デザイン研修」の2回を開催した。課題は、文化芸術は富裕層の趣味という考えが根深いことから、文化芸術の社会的価値を伝え文化芸術によるまちづくりを推進するとともに、課題解決のために事業を実施するという考えを学ぶために、デザインに関する研修会を実施している。目的は、文化芸術が一部の人の趣味という認識から、まちづくりやひとづくりに有効な手段になり得るということを理解してもらいたいということで実施している。成果目標は参加人数である。評価は、講師の謝金については国の基準に基づいた支出に努め、広報物は自作する等して節約に努めている。概ね予定通りに行うことが出来た。有効性評価は、文化芸術活動のまちづくり研修会では、行政で重視する「協働」のあり方に関して改めて考える機会となった他、「デザイン研修」では、課題に対して事業を実施していくための考え方や事例を学ぶ貴重な機会となったことから、研修を開催した目的は達成されているものと考えている。次年度への改善は、研修は継続していくことが重要であることから、今後も計画的に実施していきたいと考えている。

次は、「SAKATAアートマルシェ」について、希望ホールにて大ホール・小ホール・ホワイエを使って様々な発表をしたり、食文化ということでお店を出してもらったり、様々なアートに親しんでもらおうというイベントを行った。課題は、アンケート結果より、きっかけがなく文化芸術に参加できない市民が多いということで、どの年代でも気軽に様々なアートを体験できる場を提供した。目的は、文化芸術に参加することの敷居を低くして身近に感じてもらうことで「文化芸術活動に参加したい市民の割合」と「子どもたちの文化芸術に触れる機会に対する満足度」をあげる事である。成果は、参加人数、出演者、来場者の満足度を図るためにアンケートを実施した。評価は、出演者等と何度も協議を重ね、なるべく外注せず、あるものを最大限に利用しながら実施したことで経費を抑えることが出来た。一方、出演団体が多岐に渡ったため、調整に時間が掛かり、それに伴い、チラシやポスターの作成が遅れたことで、若干スケジュールより遅れが出た。また初めての試みということで、諸々の調整に時間が掛かった。有効性の評価は、普段ホールに来ることの少ない小さな子どもたちや親子が多く来場し、ホール全体を使ってアートで遊ぶ姿が見られた。イベントの少ない冬に実施したため、遊び場所を求めてくる人が多く見受けられた。文化芸術に興味がない方々に対しても興味を惹きつけた点で、概ね目的を達成できたと考えている。次年度は、昨年度の反省点を精査しながら、早い時期に事業内容を決定することで、広報や準備に時間をかけて、より多くの市民が興味を持ち参加できるよう取り組んでいく必要があると考えている。

次は酒田市希望音楽祭として実行委員会で企画した事業である。市原多朗マスターコースでは、課題は、文化芸術推進計画に伴うアンケート結果により、文化施設等で鑑賞したことがある市民の割合が少ないことから、多様な事業を実施する必要があり実施した。目的は、世界のオペラ座で活躍した市原多朗氏が、プロの声楽家に対し指導する様子を公開することで、市民が質の高い文化芸術に触れる貴重な機会をつくと共にオリジナル性も高いことから、文化芸術に関する市民の関心を高めるために実施した。成果は、入場者数と満足度で、評価としては、入場者数は目標値には至らなかったが、実費弁償に理解いただく等、経費節減に努めた。予算、スケジュール共、計画通り出来た。有効性の評価については、公開レッスン並びにコンサートを通してオリジナル性も高く、質も高い鑑賞機会を提供することが出来たと考えている。次年度への繋がりについては、市民の広がりをつくるための取り組みを検討する必要があると考えている。

次は山形交響楽団によるクリニックである。市内の中学校3校に山形交響楽団の楽団員から、楽器クリニックに行いっていただいた。課題は、吹奏楽部の活動は活発に行われているが、上位の大会に出場する学校が少ない状況にある事から、レベルアップを目指せるような授業を行っていききたいと考えている。目的は、生徒のモチベーションを上げてレベルアップを目指す意識の醸成をはかりたいということである。成果は、生徒

の満足度についてアンケート実施している。評価は、助成金の申請をし、財源を確保した。そして、適正な予算執行に努めた。予算は、概ね計画通りに行うことが出来たが、スケジュール的に講師の予定が決まらず、結果的に募集期間が短くなってしまった。有効性は、継続的に行いレベルアップした学校もあったので初年度としては概ね達成したと判断している。次年度の継続については、市内の学校すべてがレベルアップを実感できるように、引き続きクリニックを実施していきたいと考えている。クリニックの内容は、顧問の先生方と課題を共有し、課題解決に向けた取り組みをする必要があると考えている。

次に新日本フィルハーモニー交響楽団弦楽五重奏及び酒田特別支援学校へのアウトリーチである。こちらは希望ホールの小ホールで新日本フィルハーモニー交響楽団の弦楽五重奏を実施すると共に酒田特別支援学校でアウトリーチをしていただいた。課題は、文化施設等で鑑賞したことのある市民の割合が低いということで、子供たちを含めた鑑賞機会の充実を図る必要があると考えている。目的は、文化芸術に触れる機会が地方では少ない状況にあることから、気軽に鑑賞・参加しやすい環境づくり「文化芸術活動の満足度」、「文化芸術活動を鑑賞した市民の割合」、「子ども達の文化芸術に触れる機会に対する満足度」の向上に繋がりたいと考えている。成果は、満足度をアンケートで実施。また特別支援学校では、生徒たちがプロの音楽の鑑賞をして、音楽に親しみ、楽しんでいただく事。評価は、コンサートでは予定を上回る販売枚数となった。予算は、プログラム印刷を庁内で行ったため、経費を抑えることが出来た。出演者とのスケジュールの調整に時間が掛かり、開催時期の決定に遅れが生じたが、事業は概ね計画通り実施出来た。有効性評価は、コンサートでは市民に質の高い鑑賞機会を提供することができたが、学生の来場が少なかったため目的達成とは評価し難いものであった。特別支援学校のアウトリーチでは、生の演奏を聴く機会の提供ができたという面で、生徒はもちろんのこと、学校側の評価も高く、概ね目的は達成されたものと考えている。次年度は、出演者も含め、どういった形で鑑賞機会の充実に取り組んでいくか検討が必要であると考えている。

次は、ヒビカルによるアウトリーチである。東京藝術大学の学生を中心とした吹奏楽グループ、ヒビカルからアウトリーチを行っていただいた。課題は、希望ホールを始め市内中心部に在住の市民に対する催事が多いことから、劇場に足を運ぶ機会の少ない市民に文化芸術にふれる機会を提供する必要性があった。目的は、より多くの市民が文化芸術に触れる機会をもつことである。成果は、満足度で、評価は、効率的な予算執行に努め、予算スケジュールと共に概ね予定通り出来た。有効性評価は、満足度も高く大変喜んでいただいたと共に、福祉施設に行ったこともあり、アーティストにとっても学びの多いアウトリーチだったとの声をいただいた。次年度は、より多く市民に対し文化芸術に触れる機会を増やすため、継続的に取り組めるよう検討を行う必要があると考えている。

次は市民芸術祭で、障がい者アート展が中心となる。実態と課題は、酒田市は文化芸術活動に参加しやすい街かという問いに対して「あまりそうは思わない」、「全くそうは思わない」という市民が多かったことから、どんな人でも参加しやすい芸術の鑑賞、発表の場の創出と文化芸術による社会包摂を目指すものということで実施している。目的は、障がいのある方への理解を深めることで、計画で設定した評価指標を上げたいと考えている。成果は来場者数で、評価は、広報物を内部で作成して効率的な事業の実施に繋げている。また、委託先の社会福祉協議会と協議しながら経費削減に努めた。有効性評価は、障がいのある人ない人にも、文化芸術の発表・鑑賞の場を提供し、多くの人に来場してもらうことで障害のある方について、理解を深めてもらうことが出来たと考えている。次年度は、展示方法と広報戦略について検討し、より多くの人に来てもらえるように継続的に取り組んでいきたいと考えている。

以上が平成30年度の事業説明である。今年度の事業については、まだ実施していないので、ActionとPlanについてのみ入力してある。事業が終了次第、DoとCheckを記入して随時送付する。お手数をお掛けするが、よろしく願います。

7. 意見交換

会長

ただいまの事業に対する説明を通じて評価システムについても説明があったが、まだ行政当局がこれに慣れていないので、全員から意見をいただきたい。

委員

昨年度の事業の説明を聞いて評価をお願いするということだが、実際に事業に立ち会い、実施状況を見ていないので、この話だけで評価を出すのは非常に難しいと感じている。今後、市原多朗さんのマスターコースもあるので、これから実際の事業を見て、評価を出していきたいと考えている。同様に、これは繰り返しになるが、実際に事業を立ち上げて一年になるが、浸透しているのかは表面的には、まだ分からない、まだ深く一般の人までは行き届いていない感じがする。変わったところがあっても、実際はどうなのかという言葉が返ってくるので、しつこいくらい新しく変わったということをもっと色々な場で周知してもらいたい。

決して間違った方向に進んでいる訳ではないので。市民がもっと自己参画というか協働、参加をして作っていくことを大事にしたいと思う。それはやはり、市民から知ってもらわないと始まらないので、より強力で周知して欲しいと考える。

委員

評価の欄で、来年度も継続した方が良く、または中止した方が良くというような評価はしないのか。

会長

それはある。現段階では、自己評価なので、継続すべきか否かは、行政の中では判断できなかったという事。ただ、判断してもらいたいと要求はできる。

委員

実際、所管部署の少ない人数で、これだけ沢山の事業を良く出来ると思うし関心もする。一つ一つが、すごく大変なことで全ての事業に対して力を入れて行っていることは、大変評価するが、その割にその努力が実っていないように感じていて、少々気の毒に思う。あまりにも多くの事業をやり過ぎていて、各事業の企画と実施の間の解決しなければいけない課題に重層性が損なわれているのではないかと感じる。先ほどの意見で、中々浸透していかないというのは、もしかしたらそこに要因があるのではないかと。

それから、ざっと全体を見ると音楽系がとても多く、美術系がすごく少ない。市民の日常生活で文化芸術が一番身近なのは、実際は音楽よりも美術系の洗練度である。たとえば新聞やチラシも市報もそうですが、それらの構成とかデザインには内容も然ることながら美的センスが不可欠である。テレビや映画でも美的な構成があって全てのアートが絡んでいる。美術系に造詣の深い方々の力や知恵を借りて、もう少し美術系のプログラムを増やすべきではないかと考える。

また、いくつかの事業は、自分も実際行って見聞きしているので評価できるのは確かであるが、見聞きしていない事業に関しては評価することは困難である。

委員

評価をするということは、次の事業を精選するということに繋がっていくと思う。自分で自分を評価することは、あまり悪い部分には目が行き届かず、少し甘めに、良い部分を重視しようという気にもなる、まずはそこを精選して、内容の濃いものに繋がれば良いと感じた。

一つ質問させてもらいたいが、事業の対象として、一般市民、また、子供から高齢者までとあるが、どう違うのか。子どもという場合は、どの年齢層を子どもとしているのか。子どもから高齢者までの幅広い市民と、一般

市民は、どういう区分けをしているのか。

会長

質問については、後ほどまとめて答えてもらう。

委員

予算内訳の評価は、全部適正。コストの評価も、全部適正。資料を作るエネルギーを、どこか別に向けるべきだと思ってしまう。例えば民間の会社で、このような資料が社長に提出されたとしたら、まったく認められることが出来ないであろう。なぜなら、根拠となる数字が一つもない、何をもちって適切と判断したのか、そのエビデンスが、まったく示されていない。

成果については、ほぼ入場者数と記載がある。入場者数は、他の資料で分析された結果の資料があるので、きっとそこには書いてあるとは思いますが、根拠法令には、同じ条例がずっと並んでいる。どのようにいえば良いのか分からないが、たいへん理解が難しい。

これは極めて行政的な資料であり、例えば、こうした資料であれば国なりから沢山お金が頂けたりするなら、それはそれで大変結構なことだと思うが、真実の評価になっているのかどうか、とてもこの資料からは判断できない。コメントがとてもし辛い。

会長

このことについても、また後程回答をいただくこととする。

委員

全く同感である。事務局が評価した資料を見せられ、我々は何を求められているのか。頑張ってもらいますね、評価をしてみましたね、この資料の作成にあたり、事務局が無駄な時間を掛けていなければいいな、としか思えない。さきほどの事務局の説明で、8月に我々に何か送られてくるということだったが、何が届いて何をしろというのか。

会長

議論が停滞してしまっているので、ここで一旦中断して、これまでの質問に事務局から返答願う。

子どもから高齢者、一般市民の区分について返答をお願いします。

事務局

事務局としても細かい定義を統一していなかったもので、各項目を記入した担当者のニュアンスで変わってしまった。

会長

それから、美術系の事業が少ないのはどうしてなのか。

事務局

今までの事業の流れとして、音楽の町として強く推進してきたので、美術系の事業が少ないのは、指摘のとおりである。

会長

次に、我々審議委員が何を求められているのか分からないという意見について。

まず、アクションからチェックまでの位置付けを少し説明した方が良いと思うので、参考までに申し上げる。アクションからチェックまでの経営分析の方法を使うことは、良く使われる手法であるが、これは外部に公開するものではない。内部で自己評価や反省するためのものである。内部の資料として考えた方が良い。行政評価、政策評価の世界でいうと、事務事業評価とプログラム評価、ここまでは内部で出来るというのが一般理論である。

事務事業評価、いわゆるコスト評価。与えられた予算、人員、時間を出来るだけ無駄に使わないように実施

したか、これは経済性評価である。生産性となっているが、経済性とした方が良い。

プログラム評価は執行評価で、これはパフォーマンスが達成されたか、予算上期待していたことが出来たか、場合によっては予算以上にサービスが出来たとか、たくさんの人が来てくれたとか、それは更により評価となる。

有効性評価は、とても難しくなってしまうところがあり、公益性や公共性という世界は、行政の中にあるが、企業の場合は利益率となる。行政は企業のように単純な経営ではなく、複雑である。安全、平和、安らぎ、学力向上等、全部が公益性である、いじめがなくなった等も公共性となる。このような公共性は、きちんと指標を特定しないと有効性評価はできないという論理があり、特定された目標をいかに指標化するかということが必要であり、その特定された指標に基づいて有効性を測定することになる。ところがこの作業が難しい。多くの事業は、本日示された資料形式では行っていない。目標としての作業をしていない。そのため、指標化できないので、出来たものと考え、指標にもなったという答えにしかならない。

例えば、子どもたちの間の相互のコミュニケーション密度が高まり、お互いの信頼関係が高まったのでいじめがゼロになった、というのを目標とするならば、有効性はいじめがゼロだということは有効であり、明確である。単なる理念で非常に高い事業が供給できたと思う、というのは有効性評価ではない。しかし、そこまでは要求できないので、いまのところこれで評価する訓練をしていただいたようなものかなと私は思っている。

勇気を出して行ってもらって良い。外部に公表する必要はない。問題は、有効性評価について、どのような公益的価値を指標として特定するかという努力が必要である。ある自治体は、既に降参して審議会の中に評価部会を作ってもらい、その評価部会の中でモデル的に特定施設を見てもらう。モデル事業を分析して評価してもらうように変えている自治体も多い。それ以外は全部内部評価で報告書を出す。ただ改善の必要があるという答えや、事業を拡大するという答えもあり、それは継続であっても改善と拡大。廃止という答えがでる場合もある。

この資料作成にあたり、行政は苦勞したと思う。そこを私は責めるつもりはない。これは難度の高い資料である。ただ評価のない仕事はありえないので、この点には慣れてもらいたい。評価を飛ばしてしまうと、芸術至上主義や貴族主義のようになり、絶対的に良いものは良いといった宗教的な世界になってしまう。

委員

評価を中心にチェックポイントをそれぞれ挙げていただいたが、文化芸術に関わる自分の知り合いの方々は、昨年度の外郭団体の解散に不満を持っているため、批判的に考えている方々と、一緒に協働の精神で協力していこうという方々と、大きく二つに分かれてしまっている。それぞれの評価項目について、ある程度は意見を聞いてきたが、かなり厳しい意見が多い。その原因は人口十万人規模の都市で事業を成功させるということは、多くの方々の協力が不可欠である。これまでの軋轢はもう終わりにして、今年度から新たにスタートしたいと思う。これまでは、協働の精神と社会包摂といった、大事な方向に向かっていなかったのではないかと。まずは我々が原点に立ち返り、しっかりとした考えを持つべきである。

人を集める、子どもを集めるということは、中々に難しい面がある。どのような企画なのかを確実に伝える、また、全体として、もっと早くから準備すべきである。

4月に庄内能楽館40周年記念特別公演として、人間国宝の野村万作と野村萬斎の親子の共演があった。実行委員は約1年間掛けて準備を行った。実行委員もプロではないので、企画は抜けている面も多くあったものの、不平不満が出るどころか、やって良かった、二度とない公演になるだろうとの声が多かった。チケットは二日間で完売した。そういう感動を与えるようなものを、私共は準備し、あるいは情報をいただき、良い事業を展開していく事が必要である。

委員

話を聞いていて自分が感じるのは、近年は他部署とのタイアップ等で広く情報発信されているという感覚を持っている。ワークショップ型のものが多く、楽しみながら色々なことにチャレンジでき、色々な方向性が出てきていると感じている。そこはとてもありがたいと思っている。

先ほど、ときひろ先生の中身の時に、他の夏休みの事業と重なったとの話があったが、学校でもそうだが、一つの部署だけで事業を行っている、誰かが全体を俯瞰してみていると調整ができない。多くの方々から参加していただきたいとすれば、全部というのは無理かも知れないが、同じ教育委員会内の事業であれば、調整しながら実施できれば、参加も広がると感じた。

同じく学校現場として、アウトリーチ的な提案をいただき、校長会でも説明いただくが、年間の計画は、前年度の1月か2月くらいで、ある程度が決定してしまうので、いくら興味関心があっても、それからでは応募するのは難しい。予算が決まらないうちに、情報発信するのは難しいとは思いますが、来年度計画を早めに情報発信してもらえれば、もっと計画性を持って、自分の学校では、こうした部分を高めたいから、この事業を実施したい等の企画ができるので、そうした情報発信をお願いできたら、もっと効果的に実施できると思う。

なお、中学校の吹奏楽関連の事業は、毎年必ず実施すると分かっているならば、そのつもりで来年は手を挙げようということになると思う。単年度ごとの事業において、来年以降どうなるか分からないとなれば、そうした事業に対して予定を組むことが難しい現場としては、先を見通したうえで連絡をいただければ有難い。

また、自分は良く分からないので聞くのだが、事業の実施は、何を基準に決めているのか。単純に話題性を基準としているのか。例えば、今年も昨年もこのジャンルはやっていた、このジャンルはまだしていないから、もっと市民の人から広く楽しんでもらいたいといった、そういう全体的に大きな方針があり、そこから事業のジャンル等の配分が出来ないものなのか。一つのもの、例えばクラシック音楽だけに偏ることがないように、全体を把握して、できるだけ広く、また多くの方が魅力を感じて参加意欲の沸くようなものが良いと思う。

会長

これまでの質問について、事務局より返答を願う。

事務局

事務局として、どのような評価資料を本審議会に提出するか悩んだが、結果として、提出資料が分かりやすいと判断して提出したものである。

会長

行政にとっては、良い訓練になったとは思う。

事務局

本日いただいた意見を元に、事務局で評価に係る資料の形式について検討する。可能であれば、事務局の負担も考慮して、より良い方向に出来ればと考える。

会長

先ほど質問のあった、一般市民と子どもから高齢者の区分は、担当者が違うと書き方が違うのか。

事務局

各担当職員の考え方を統一せずに記載してしまった。

委員

ニュアンスが異なると、受け止め方も異なるので、話し合いをして、きちんと定義付けして記載するように。やはり、子どもから高齢者までといわれると、いったい、ここでいう子どもの年齢層は何歳なのかと疑問に感じてしまう。出来るだけストレートに伝わるようにしてもらいたい。

会長

これについては、事前に資料についてアドバイスを求められた際に、きちんとした政策が出来るようにする

には、基礎工事が必要で、その基礎工事には事業一つにつき、一枚ずつ事業カードを作ってもらいたいとアドバイスしました。イメージが良く分からないという自治体の方には、行財政改革の時に出す事業改革カードを少し改造すれば出来ると言っている。その事業カードを用意すれば一目瞭然になる。次に何を分析するかというと、どれだけのジャンルにまたがった事業をしているかを整理する。

先ほど、劇場系の分野が多くて、美術館、博物館事業が少ないという意見があった。そこが少し弱いのかもれないという分析をしている。それが音楽系であったとしても、クラシック系なのかポップス系なのかという分類も必要になる。同じ音楽という大きな枠の中で狙いは見えてくる。どのような芸術ジャンルの事業を供給しているのかということを実態分析できるデータが欲しい。

0歳から100歳まで、男性女性、勤労者、障がいがある人ない人、どのような属性の方々を対象にしているのか。以前より話しているが、いわゆるポピュラーな演目、しかも東京で見られるような単価で行うような貸ホール型の事業は対象に入っていないし、入れる必要はない。持ち込み事業なので、行政が公共的な財を使ってやるべき事業ではない。民間が貸ホールを使ってやればいいだけの話である。ただ、ホールは光熱水費の償却等、必要経費も生じるので、空いているともったいないので、出来るだけホールの貸館率を上げる経営の努力としては、評価指標にはなる。

話を元に戻すと、0歳から100歳までの内、例えば低所得者階層の子ども達に対する戦略を持った事業があるのか。母子父子家庭の子どもは、相対的にアートに触れることが社会的に不利な状況にある。それをきちんと手当する事業があるのかということ、チェック出来るようにしてもらいたい。広く一般の市民に門戸が開かれていることは当然だが、その中でも特にどのようなレベルの階層の人をターゲティングしているのかということを知っている訳である。評価資料にある、対象はどのような階層なのかという問いに、中学生と答えるということは、中学生以外でも入場は出来るが、特に中学生にターゲティングしているということであり、そこを勘違いしないでもらいたい。

最後に、距離的な偏差については、希望ホールの近くに居住している人ばかりが参加しやすい現状で、遠方の方々は中々参加が難しいという状況を解消するためにアウトリーチを実施したはず。その結果、すごく好評だった、このような地域的な偏差を解消する事業は何があるかということを確認するものである。

評価が一目瞭然で、分析が容易な基礎データになるような事業カードを作成しようというのが、当面の目標かなと考えている。事務局に伝えたかったのは、そのような意図である。

事務局

そうした意図を明確に汲むことが出来ず申し訳なかった。去年は自主事業等が市民主導型で行っていたので、そのような形式でしか、取りまとめをしていなかった。今年度からは、推進計画に基づいて事業がスタートしているので、今年度分からは、本日も指摘いただいた作り方にする。

会長

事業カードの作成は、とても大変な作業になる可能性はあるが、一回作れば、翌年からは楽になる。各担当で、今年の改正点等のみを反映させれば済むことになる。

もう一つ質問が残っている。継続とか廃止、拡大、新規などの判断はどこでやるのか、内部評価の段階から案として出るはずだが、それについてのデータはないのか。行財政改革なら廃止、あるいは改善、拡大、あるいは新規が出てくる。廃止して新規にするとか、そういう記述を入れていく事は、事業カードでなら可能だと思うので、その方向で検討してもらいたい。

委員

他の委員の意見を聞いていて、審議委員が個別の事業評価を行うことについて、意味がないとは言わないが、細かい字が羅列された、こうした資料のすべてに目を通して、我々審議委員が評価することは無理で

ある。こうしたことには行政側の練習も必要だろうし、これと事業カードの両方を行うことは、いかがなものかと感じる。いわゆる評価の泥沼、評価疲れになる可能性がある。

基本的に文化芸術は、特にホール事業が多く、消えて無くなるもので、やったもの勝ちの印象が強い。特に行政は真面目なので、文化芸術や市民のための事業なのか、政策のための事業なのか、最悪は評価シートのための事業なのかということが、すぐに少しずつ曖昧になっていく。

先ほど、一般市民と子供から高齢者までニュアンスの差があるという意見があったが、それについて私がお薦めするのは、評価シートを部外秘等の扱いにして、もっと率直に根拠となる数字も記載して、事務局内において、本音で評価しあうことである。各事業の評価について、当事者同士で議論していないと感じる。

例えば、一般市民と子供から高齢者までという言葉が並列していることに、なぜ事務局で違和感を持たなかったのか。大きな問題ではないかも知れないが、大事なことである。そこをどう考えるかがアートマネジメントのクオリティ。辻褄を合わせるのではなく、今こういう部分について、しっかり考えて行かないと事業は良くなっていかない。

今回の結果から、事務局の労力が大変だったであろうとも思うが、評価が目的化することは、文化芸術にとっては、とても危険なことである。ある程度、正解が決まっているような分野であればまだしも、正解のない文化芸術では、評価の目的化はとても危険である。

また、例えば希望ホール全体として、自主事業だけ並べても、なぜこの事業を行っているかも分からないので、ホールそのものとしてどうなのかということを問うのなら、貸館事業がどのくらい実施していて、どのような分野が多かったのか、そうしたことが分かるような資料が評価するには必要である。事業全体を見渡して、クラシック音楽が少ないから、クラシック音楽の事業を多く自主事業で行った結果、このような結果であったという報告がないと、それが妥当かどうかは判断できない。推進計画の実施にあたり、方向性が間違っていないか、成果が上がっているか否かを判断する立場で、個別の事業評価を行うのは無理な気がする。

例えば希望ホールであれば、関連する全体の資料も必要である。大きな政策目標があり、貸館は概ね順調なのか、どういうことを補うために、あるいは政策のどの部分を目標とするために、このような事業を行ったけども、バランス的にどうだったかといった説明資料等が必要である。加えて、希望ホールの事業だけ多く羅列されているが、酒田市美術館、土門拳記念館は概要的な資料に留まっていて、推進計画を評価するには、資料も含めてアンバランスである。政策目標として行ったこと、課題だと思っていること、さらに次に改善していくこと等、もっと全体的にまとめたものを作成してもらいたい。個人的には、いつも地元の皆様の反応を見ながら、意見を言っているつもりである。せっかく委員の皆様が都合を合わせて集まって審議しているのだから、できれば事前評価を依頼するのではなく、当日に資料を見て、その場で我々が内容を掴み、審議することが出来るようにしてもらいたい。

会長

もう一度、最初に立ち返って話を確認すると、条例及び審議会が出来て、さらに推進計画が策定され、法定外自治事務の3点セットが揃った。推進計画が策定された後の審議会の役割は何かというと、きちんと条例が運営されているか、そして推進計画が、その通りに実行され、成果を上げているのか、それが審議会のルーティン・ワークとなる、またそれを毎年諮問されてくる。それらの繰り返しで、良い意味での監視役である。

ここで評価の話に戻すと、審議委員は、事務事業評価やプログラム評価は内部評価に任せる、そこまで我々が口出しする時間もないし、内部の実情も知っている訳でもない。事務局が一所懸命頑張っているのに、下手をすると、それに対して的外れな失言をしてしまう可能性もある。今回、提出された資料は、内部文政のためのツールなので、それを活用して、廃止、継続とかの方向性等は、内部評価で答えが出る問題である。ただし、有効性評価だけは、審議会に諮り、専門家の意見を聞いたうえで、確定させた方が良いと思

う。実施事業全体の評価するのは丁寧ではあるが、特に計画通りに事業を実施している面を重視して評価してもらいたい。

ただ、美術系の事業が少ないということは、確かに厳しいご指摘だと受け止めた方が良いと思う。他に文学もある。文学は生涯学習分野で実施していることと思うが、そういうものも資料提出した方が良いのではないか。短歌や小説を頑張っている人もいるかもしれない。そういうことも含めて把握しないといけないと思う、現況では、データが偏りすぎている。

今回、評価に係る作業は、良い作業をしたとは思いますが、内部評価のためのツールとして使用してもらいたい。そうすることで、しっかりとした立論が可能と考える。この審議会の役割は、政策評価に対する諮問を受けて、答申を出すことだと考えている。本日の議論でも既に出てきている、美術系統の事業を、今後、実施していただきたいというのも、答申の一つである。それから、一般市民と子どもから高齢者というのは、きちんとしたターゲティングがされていないのではないかとこの疑念を提案した訳である。

また、例えば、モデル事業をいくつか行政側が選定して、それについて担当の審議委員が現地に行って参考意見を出して評価してもらおうという方法もある。審議会でモデル事業を選定するやり方もあるし、行政側から選定する事業を要望するという方法もある。これは滋賀県で行っている方式。滋賀県では県立美術館と琵琶湖ホールは毎年定点観測することになっていて、審議会の評価部会の委員も必ず見に行く。特定の事業について、担当の評価部会の委員全員で手分けして、1人が大体2〜3事業を見に行く、そういった方法もある。それを持ち寄り、全体の審議会で計画が順調に進んでいるかどうか意見を出し合い答申を出す。そういった方法もあるので、検討してみるのも良いかと思う。行政にとって過剰な負担にならず、かつ効率的な方法を提案してもらえればと思う。

委員

私も、文化芸術に係る事業は、行政にとって過剰な負担になっていると思う。個人的に、ずっと何年も文化芸術と担当部署に関わってきているが、本当に業務が大変だという担当者が必ずいるので、評価についても、もっとあっさりして良いのではないかと思う。滋賀県は、日本でトップクラスの障がい者アート展を行っている。鳥取や島根でも、個人的に多少関わっていて、実際に行くこともあるが、本当に情熱的に毎年やっている。それで見た人も聞いた人も、結果的に良かったとなるような構えで良いのではないか。

会長

出来るだけ行政事務担当の過剰負担、過剰労働にならないようにと答申に入れたらどうか。出来るだけ事業を減らした方が良い。有効な事業に集中してもらいたい。たくさんバリエーション増やすことが正しいこととは思わない。

委員

昨年の「SAKATA アートマルシェ」は、大変頑張ってもらった事業だと思うが、それこそ対象を「一般市民」の四文字で括らずに、「乳幼児から高齢者まで」と、それこそ自信を持って記載して良かったと思う。

おそらく、普段はホールに来たことのないであろう2歳児くらいの子がお父さんと一緒に楽しそうに帰って行く姿を見たが、今まで、そういった姿を見たことがなかったので、やはり実施して良かったと思う。あの場では、美術も音楽も写真も総合的にコラボレーションした感じの内容だった。そこに障がい者アート展等もコラボレーションすれば、より広く色々な人達からホールに来ていただけて、色々と知っていただけたと感じた。

昨年度に実施したことを土台にして、さらに広げる方法が、たくさんあると感じる。出羽人形芝居でも、子どもから大人まで幅広い年代と一緒に楽しみ、人形の操作方法に興味を示す子どももいた。そうすると、ホワイエで行った人形制作等にも繋がり、アートマルシェの幅が、次々に広がっているのを感じたし、出羽人形芝居という酒田の財産を他地域等のものとコラボレーションする等して、地域資源の周知にも繋がるのではと感じ

た。そうしたところ、一般市民という四文字では括ることのできない内容であったと思う。

会長

それでは一端ここで意見交換を終了する。次に、今年度の下半期事業の説明を願う。

8. その他

事務局

今年度の下半期の事業を説明する。若竹ミュージカル音楽の町プロジェクトでは、東京学藝大学特別支援学校の卒業生の皆様とその保護者、そして今回は酒田特別支援学校高等部の皆様がステージで共演する予定となっている。また、障がい者アート展も希望ホールで同時開催する。土門拳文化賞授賞式が9月にあり、それと同時に写真関係の事業も行っていく。昨年度に引き続きアートマルシェ、更に新規事業で音楽と美術のコラボレーション事業も実施する予定である。下半期の事業については、来年度にまた評価をお願いすることを考えている。それと皆様に、市原多朗マスターコースの招待券を配布しているが、評価いただくにあたり、ご鑑賞いただければと思うので、よろしくお願ひしたい。

会長

次の審議会は9月ということだが、その間に今年度実施事業の評価もお願いするということがあったが、このような細かい個別の評価はせず、もっと分かりやすい簡単な方法で行うこととする。

委員

このような資料等を作成する事務局が辛いのではなかと、正直思ってしまう。このままでは、我々は何をしなくてはいけないのか、どの方向に向かっていけばいいのか、それがまったく分からなくなってしまう。我々の存在が行政の負担になっているのではないかと考えたら、それは本末転倒になってしまうので、単純な利益追求活動とすべきである。

会長

今後、資料については工夫する。本日は、良い議論が出来たと感じる。一つは、行政内部の苦勞を、審議委員に認識してもらえた。業務量は、本当に減らすべきなので、仕事を増やすような方向は、出来るだけ避けたいと思う。ただ、仕事をするにあたり、自分で自分を評価するという訓練は必要である。良い事をしているのだから、いずれ世間は分かってくれるとか、そういう古典的な態度は通らない。外部に向けて、どのように評価されるのか問うのは、また別の評価となる。それはフィルタリングを審議会がしていく必要があるのかもしれない。我々審議委員は、きちんと条例が運用されているか、きちんと推進計画が行政で動いているのかという判断をする機関なので、うまくフィットするような資料作りを考えていく。

9. 閉会

【以上】